

あれらのルート

長谷川久一

「番町の番町知らず」とは、實際うまく云つたもので、番町で生れ番町で育つた生粹の番町ッ子にして見たところで、自家即近のことは知つてゐるにしても、全體にわたつては詳しくは知らないといふ事を捉らへ來つたものである。屋敷町のことではあり、人通りは少いし、會々向ふから按摩でも來合はせたなら眼明きが盲人に道を聞くといふことは敢て珍らしくはない。そこへ引ッ掛けて、番町の塙檢校の門に來り學ぶものが多いことを、「番町で眼明き盲人に道を聞き」といふ落首にした者と思はれる。當時この盲人學者に師事したものは一般の學徒はもとよりのこと、比較的著明の學者たちまでも争つて教を受けに來たのであつた。幕府祐筆勘定格の屋代弘賢や幕臣で柳石と號した學者中山信名、江戸在住の久留米藩士で武家古實家の松岡辰方等その著しいものであつた。渡邊刀水將軍は和學講談所と文庫とは兩々相俟つてその頃の

好學の人々を引きつけた。即ち今日で云へば東京帝大とその附屬圖書館といふ有様であつたと云はれてゐるが、然らば林家との間柄はどうであつたかといふ疑問が立ちどころに起るに違ひない。が併し幸なことに人なみ外づれて辛抱強く、常に謙讓を旨としてゐた苦勞人たる塙檢校のことであるから、林家との間に摩擦相剋を惹き起すが如きことは決してなかつたものらしい。その當時に於ける一般情勢では朱子學以外の儒者は殆ど漏れなく林家から仇敵視され排撃された中であつて、獨り閩齋派に屬する塙檢校が林家から排斥を受けるどころか、反つて篤い援助を受けたといふのは、檢校の人格の純眞でありその攻學精神の熾烈旺盛何人をも感奮措く能はざらしむるものがあつたに基因すると思ふのである。従つて檢校四十八歳のとき正式に和學講談所と文庫との設立許可があり、その時分から幕府（水戸藩からその以前）から史料蒐集

のことや武家故實の調査について命を受くるに至り、着々その成果が擧がつて行つたものであるから、學者としての盛名も天下に響き渡るに至つたのである。斯くて七十歳にして始めて將軍に謁し、七十四歳のとき畢生の心血を注いだ群書類従六百六十五冊の刊行を完成し、そうして文政四年九月十二日七十六歳の長壽を保つて病歿したのである。この群書類従刊行のためには、先づ第一に原本とすべき良本を選定しなければならず、多數の中から最も佳良の本を選び出した後、尙之に多くの同種の書を突き合はせて校讐しなければならぬ。かくして基準となる定本が出来上つて板行をする順序となる。上梓に當つては今日の活版印刷の如くに簡便には行かぬからなみ大抵の努力では成し遂げ難い。それを檢校はその不逞、不屈不撓の精神力を以て貫き通ほしたのであるから、實に偉大な鴻績といはざるを得ない、書籍を澤山蒐集するのには、購求もし借用もし或は謄寫せしめたりした。又蒐集の必要から不自由な盲人の身ながら屢々長途の旅行もした。後に幕府の命を奉じ史料の蒐集をするやうになつてからは、盲人として上位の檢校となり更に總録に昇格もしたから、旅行にも書籍の借用謄寫にもさほど骨が折れなかつたと思はれるが、最初の時期即ち三十四五歳から四十歳前後のころには、随分と艱難辛苦をしたに違ひない。東海道行脚に出掛けたことも度々のことであつた。而して何時も心にかゝるのは富士の高根であり、これを眺めること

の叶はないのは云ひしれぬ惱みの種であつた。

言の葉の及ばぬ身には眼に見ぬも

なかなかよしや雪のふじのね

といふ歌がある。然るに連城亭隨筆のなかに出てゐるのに

何事も見えぬに馴れて歎かねど

富士とし聞けば涙こぼるる

この二首は同時のものか時を異にして詠じられたものか能くは

判らぬが、檢校の俳句に

花ならばさはりても見む今日の月

とあるのと照應して見て洵に同情に堪えないのである。併し盲人なればこそ攻學に専念し反つて眼明きの爲し遂げ得ざる大事業を完成し得たのは、唯徒らに不具者なるをかこつことなく、不具者の境遇を存分に善用したからで、依つて人文に大なる貢献をなすに至つたのである。もと糸竹の道にも按慶鍼の道にも従事してみたが、その博覽強記拔群なる點が師の雨宮檢校の認むるところとなり遂に學に専心精進することとなつた。これ蓋し邦家のためにも檢校自身のためにも偏に仕合はせであつたと思ふと同時に、師の雨宮檢校の英斷も亦決して見逃がすことの能きない好き分別であつたのである。

東海道を旅行して來た塙檢校は、名古屋で先づ熱田神宮所藏の日本記を寫し、大須の觀音でもつて色々の古書珍籍を閲覽し、寺

の方丈を借り受け大勢の筆工を督して之れらを騰寫せしめ、藩からは寺社方の役人までが出張して監視すると云ふ勉強振りを示したといふ。かういふ收獲があればこそ不自由な身にも拘はらず旅行も厭はなかつたのであらう。而かも一方からいへば檢校は生來金鏡に恬淡であつたから澤山の旅費を携帶してゐた筈がなく、従つて道中で盜難にあふやうな虞れは更になく、反つていつも安全な旅行をしてゐたのかも知れない。否な更に進んで云へば檢校かその心眼の明察衆に勝ぐれ、道といふものを判然と前以て辨まへてゐたといふことが謂ひ得られると思ふ。その修學振りに就ても筋道の通はつた單刀直入的な効果を擧げつゝ進んで行つたから、あれだけの蘊蓄を得て盲目といふハンデイキャップを優に克服して餘りある業績を残したのであらう。檢校は入用の書籍を求めに當り、たゞ手でもつて撫でて見て之れを取り出すのであつたが一回も誤まることになつたと云ふのである。曩きに富士の肉眼で見えぬのをがこちてよんだ歌のことを紹介したが、一面から見れば尋常一様の盲人の地位に御自分を置いて人なみの盲人として彼の二首の歌の如きのをよんだのであらう。むしろ眼あきよりもその心眼の鋭さは曇り天氣や薄雲等の障害もなく赤外線撮影した遠望の寫眞の如くに、檢校の心眼には判然と富士が映じてゐたとも見られ得るのである。即ち

あき風に尾花が末の霧はれて

ふじのね近き武藏野の原

といふ一首の如きは晴眼者も遠く及ばぬ鑑賞が可能であつたといふ一證左と見られ得るのであらう。されば旅行も決して苦痛ではなく憂々氣樂に之を試みては書籍の蒐集騰寫に従事したとも云へる。ヘレン・ケラー女史の作に「闇の歌」といふのが有名であるが、女史の篤學なる英佛獨等の現代各國語はもとより、希臘、羅甸の如きクラシックにまで精通してゐるのであるから燈なくしても暗夜を歩むことの能ざる盲人の大學者は決して心が闇どころではない。さればこそ塙檢校の如き彼の「大寶令」の一部たる「醫疾令」と「倉庫令」とが失せてしまつてゐたのを諸書に載せられてゐる斷片を順序違はず拾ひ集めて其の再構成に成功し得たのである。結局眼明きよりも筋道を辿るの明が取り分け勝くれた天稟を有つてゐたと思はれるのである。而かもその心常に邦家の上に在つたのであつて、「蜀山文稿」の中に、「國家興衰の繫がる所と忠臣孝子の履む所とに至れば、便ち未だ嘗つて恬然として涙下らざるなし」と弟子たりし塙青年の熱誠を稱へてゐる。大成した塙檢校は頼山陽の日本外史著述に就き大に指導するところがあつた。頼山陽の詩に

五十三亭控海東 故關右折路岐通

湖南草樹春雲碧 畿内客齋夕日紅

流時依然此形勝 興亡已閱幾英雄

分門攻守千年勢 著論誰道賈誼風

とあるが、之は明治維新によつて皇政復古が成り 天皇東京に
奠都し給ふべき豫言とも見られる。而かもその基く所は、山崎闇
齋の流れを汲んだ神道、荷田春滿の復古神道、加茂眞淵の國學等
あらゆる方面から皇室中心主義を研鑽し盡くした搞檢校の指導に
あつたことを思ふとき、盲人にして而かもこの懣慨家を鼓舞激勵
したその指導力の偉大なる洵に驚嘆に値するのである。畢竟山陽
外史をして、その詩の中に、「歴歴興亡指點間」と叫ばしめし原動
力は一盲人搞檢校のに胸あつたと謂はねばならない。檢校をして
かりに現代に在らしめば、吾々の進む可き道を的確に指してくれ
ることであらう。國を擧げて大東亞戰爭に轟進前しつゝあるの
今日、皇道を普及せしめむがためには、如何なる筋道を辿るを可
とすべきか、東亞の赤道を制しこの地域に盛なる經綸を行はんと

第二回道路愛護日實施に關する概要

するには果していかなる道程を以てすべきか。大東亞共榮圈の必
要とするルートはいかなる路線を取るべきか。凡そこれ等の諸問
題皆一様に搞檢校の有らたりしが如き明察を以て處理決定せられ
なければならぬ。瞎眼者の兩眼が反つて色眼鏡で見たり、偏見
に陥つたり視角を間違へたりして、反つて盲人の心眼に及ばぬこ
とのあるのを警戒すべきである。況んや「無知を以て道を蔽ふ」
(ヨフ記)ことなきや各自夫々猛省すべきものなることを特に強調
したい。それには唯徒に空想に馳せ北斗の杓をとつて酒を酌むや
りな考ではいけない、必ずや精密周到なる資料を調べて以て眞に
合理的、科學的なる立案をなし着々之を實行に移すことに行
きたいのである。

—一七・七一—

群馬縣土木課長